

言葉には 世界がある

ドイツ人、マライ・メントライン

日本語を勉強し始めたのは十五歳の頃。ドイツの北の果てに位置する地方都市キール市内の中学校の教室で、大人ばかりのグループに交じり、市民大学が提供する「日本語初級」のクラスに参加した。理由は割と単純で、子供の時から強い興味を抱いていた日本にいずれ行きたいという夢を持っていたので、その夢がかなった時、日本人と会話するために日本語が必要不可欠だから。言い換えれば、日本語さえできれば日本に行ける気がしていた。

教科書の中にあつたのはバブル時代を意識した八〇年代チックなイラストに、ビジネス会話のために日本を訪れるドイツ人男性のストーリーだった。また、ひらがな・カタカナすら教科書に登場しない初級の授業だったにも関わらず、いきなり「りんごはシュミットさんによって食べられる」と、「受身」用法が口頭で説明されるような、今思えば滅茶苦茶な授業だった。

一九九九年、夏の残暑で息苦しい地方

的な結果」と「残念な人」でドイツ語訳が違ってくる。しかも後者に關しては「同情に値する人」と少し歩み寄りながら訳すか、「人間失格」と強く突き放した感じで訳すかは、状況と話し手によって違うかもしれない。つまり、日本語の「残念」を使用する時に、その表現が使える「意味の範囲」があつて、それにピッタリ当てはまる、全く同じ範囲のドイツ語がないということ。

単語一つ一つに世界が存在する。まるで生き物のようだ。単語にはその生成過程と成長過程で吸収された地理性、社会性、文化性、時代性が大いに含まれているが、それだけではない。単語はそれぞれ色、響き、サイズといった感覚的な性質を持っている。私たちはそこに凝縮された世界観を借りて、様々なモノを定義し、他人に伝えるためのツールとして利用している。

しかし、「全ての現象を表現するための言葉」は一言語の中に用意されていない。それもあるって、母語のドイツ語には全くない表現が日本語の中にあつたりす

場する単語が、旅行者向けの辞書に載っているはずがない。

そうすると、唯一頼りになるのは同級生や担任の先生による必死な英語訳と、自分自身の観察力のみ。言葉ではなくて、その場の雰囲気、みんなの反応、声のトーン。担任の先生がホームルームで真剣そうに連発する「ハンソデ」と「ナガソデ」は、どうも知っている単語「制服」に関する話で、おそらく次の日から秋パターンの登校せよ！という指示だと推測できた。

こうして、ほぼ雰囲気と勝手な想像で日本語を覚えた。時が進み、電子デバイスの恩恵によって知らない単語をすぐに確認できるようになった。これによって、効率よく日本語を学習できると思いきや、意外にもそうではなかった。

言葉には様々な種類のものがあり、「牛」や「お箸」のように、具体的なものを指す単語もあれば、気持ちや概念を指す、少しふわっとした単語もある。例えば、「残念」という単語でも、「残

る。「悔しい」、「言霊」^{ことだま}、「意識高い系」、「女子力」、「モヤモヤ感」、「居場所」、「生きづらさ」などなど。もちろん、ドイツ人も悔しがる時はある。しかし、敢えて悲しみとがっかり感の間にあるその感情を表現するための単語を作つてこなかった。つまり、ドイツ人が悔しがっている時、自分が悔しがっていることを意識していない可能性があるのだ。

その一方、悔しさを一つの感情として意識しているのに、そのための表現がなければ「モヤモヤ感」が残るだけでなく、

マライ・メントライン

1983年シュレースヴィヒ=ホルシュタイン州キール生まれ。独・和翻訳家、TVプロデューサー。小学校時代に訪れた地元の民族博物館での漢字との出会いをきっかけに、日本語にのめり込む。二度の留学を経て日本との「縁」を深め、2008年より日本在住。著書に『ドイツ語エッセイ 笑うときにも真面目なんです』（NHK出版）など。18年10月からテレビ朝日「ワイドスクランブル」にレギュラー出演。活動の幅の広がりから、「職業はドイツ人」を自称している。



とても辛いものがある。日本語のように様々な感情を細かく定義し、表現することが自分の母語のドイツ語でできないため、私は無意識的に「生きづらさ」を感じていたと思う。様々な言葉を知ることによって、目の前の世界も、内面の世界も、言語化し、再構築できるようになった。言語の勉強というのは、テストで点数を稼ぐためのものでもなければ、【意識高い系】が趣味でやるものでもない。母語であっても、外国語であっても、新しい概念を知ることによって世界が少しずつ広くなる効果があると思う。

ちなみに、ドイツ語にも日本語にない表現がある。その一つは「Ferienweh」^{フェレンツェー}。今は「旅行に出掛けたい!」、つまり旅心という意味合いで使われることも多いが、本来の意味はホームシックの反対。今の場所は居心地が悪く、当てもなくどこか別の場所に行きたい気分。【居場所】探しの一種かもしれない。私が居場所を日本語の中で見つけたように、そんな居場所を言葉の世界で見つけられたら、素敵だと思う。